Certificate Programme on Nature Conservation

自然保護寄附講座

Newsletter

No. 3
Mar 1, 2017

海外インターンシップ報告

サイエンティフィックジャーナリズム報告
・「サスティナブルコーヒー」が切り拓く未来の可能性
・メキシコで新しい音楽祭　第２回「カラクムル・フェスト」開催
～マヤ系先住民言語でラップ！民族の誇りを現代音楽で歌う若者たち～

平成28年度国際シンポジウム
「Nature-Culture Linkages in Heritage Conservation in Asia and the Pacific」

国内インターンシップ報告
タスマニア実習 報告

筑波大学
University of Tsukuba

自然保護寄附講座 2017 年度開講科目一覧

E：English*コードシェア科目

科目番号	科目名	単位	年次	学期	曜時限	教室	担当教員	備考
講　義								
02JZ001	自然保護論	1.0	1-5	春B	木1,2	人社棟B218	吉田正人	要望があれば英語で授業
02JZ002	地球環境論	1.0	1-5	秋A	集中	人社棟B216	指田勝男ほか	要望があれば英語で授業
02JZ003	保護地域管理論	1.0	1-5	秋AB	火3	人社棟B216	伊藤太一	要望があれば英語で授業
02JZ004	景観・緑地保全論	1.0	1-5	秋B	随時	人社棟B216 ほか	伊藤　弘、黒田乃生	
02JZ005 =01EC565*	自然遺産論	1.0	1-5	春A	木1,2	人社棟B218	吉田正人	要望があれば英語で授業
02JZ006	生物多様性論	1.0	1-5	秋AB	水2	人社棟B216	佐伯いく代	
02JZ007	Wildlife Management (E)	1.0	1-5	秋AB	火4	人社棟B216	佐方啓介	英語で授業 (English)
02JZ008	モニタリング調査技術	1.0	1-5	春C	集中	人社棟B216	和田茂樹、武　正憲	
02JZ009 =01AD432*	植生学	1.0	1-5	秋B	火1,2	理科C103	上條隆志、川田清和、清野達之	
02JZ010 =01AD318*	Vegetation Science (E)	1.0	1-5	秋A	火1,2	理科B107	上條隆志、川田清和、清野達之	英語で授業 (English)
02JZ011 =01AB827*	遺伝子多様性学 (E)	2.0	1-5	秋AB	金1,2	生農G501	渡邉和男ほか	英語で授業 (English)
02JZ012 =01EC552*	International Conventions for Environment (E)	1.0	1-5	春C	集中	人社棟B216	吉田正人、稲葉信子、外部講師	堀江正彦氏、香坂玲氏 英語で授業 (English)　7 月 7 日・8 日
02JZ013 =01EC548*	Role of International Organizations and NGOs (E)	1.0	1-5	春C	集中	人社棟B216	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 (English) Yasushi Hibi (CI)
02JZ014 =01EC549*	International Cooperation for Environment (E)	1.0	1-5	秋B	集中	人社棟B216	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 (English) Kazunobu Suzuki (JICA), Dec 9, 10.
02JZ015 =01EC550*	Citizens' Participation for Environment (E)	1.0	1-5	秋C	集中	人社棟B216	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 (English) Patricia Alberth (World Heritage Office in Bamberg) , Jan 18, 19
02JZ016 =01EC551*	Environment and Sustainability (E)	1.0	1-5	秋A	集中	人社棟B216	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 (English) Jordi Tresserras (University of Barcelona) , Oct 27, 28
02JZ017	自然保護行政論	1.0	1-5	秋C	集中	人社棟B216	渡邉綱男 (非常勤講師)	渡邉綱男 前自然環境局長 1 月 20 日・27 日
02JZ018	自然保護法制度	1.0	1-5	秋 ABC	集中	人社棟B218	吉田正人、外部講師	
02JZ019	環境影響評価	1.0	1-5	秋 ABC	集中	人社棟B218	吉田正人、外部講師	
02JZ020	生態系の保全と復元	1.0	1-5	秋 ABC	集中	人社棟B218	佐伯いく代、外部講師	公開講座
02JZ021	自然保護教育と環境教育	1.0	1-5	春C	随時	八ヶ岳	佐伯いく代、外部講師	川嶋直氏
02JZ022	自然保護セミナー	1.0	1-5	春BC 秋A	随時	人社棟B216 ほか	佐伯いく代、佐方啓介、和田茂樹、武　正憲	6 月　エクスカーション他
02JZ023 =01EC559*	インタープリテーションとエコツーリズム	1.0	1-5	秋B	随時	人社棟B216	武　正憲	飯能市
02JZ024	ジオパーク論	1.0	1-5	秋 ABC	集中	人社棟B218	久田健一郎、佐伯いく代、外部講師	公開講座　10 月 14 日・15 日
02JZ025	サイエンティフィック・ジャーナリズム	1.0	1-5	秋 ABC	集中	生農F607	和田洋	
02JZ026	自然保護特別講義 1 (科学と社会のコミュニケーション)	1.0	1-5	夏休み	集中	人社棟B216	武　正憲、外部講師	早岡英介氏
02JZ027	自然保護特別講義 2 (Nature-Culture Linkage Workshop) (E)	1.0	1-5	夏休み	集中	人社棟B216	吉田正人	英語で授業 (English)
実習・インターンシップ								
02JZ102	海域フィールド実習	2.0	1-5	秋C	集中	下田臨海実験センター	和田茂樹・武　正憲	
02JZ106 =01EC564*	Project Practice in Natural Heritage (E)	2.0	1-5	春休み	集中	オーストラリア タスマニア島	吉田正人、佐方啓介	タスマニア大学との合同実習
02JZ107	陸域フィールド実習 1	1.0	1-5	春BC 秋A	集中	筑波山、八ヶ岳	上條隆志、佐伯いく代	筑波山 (5 月) 八ヶ岳演習林 (7 月 3 泊 4 日 (予定))
02JZ108	陸域フィールド実習 2	1.0	1-5	春BC 秋A	集中	身近な自然と里山	佐伯いく代、上條隆志	筑波周辺の身近な自然と里山 10-12 月　計 4 日
02JZ109	保護地域・野生生物管理実習 1	1.0	1-5	夏休み	集中	南アルプスほか	武　正憲、佐方啓介、伊藤太一	9 月～ 10 月予定　南アルプスほか (3 泊 4 日)
02JZ110	保護地域・野生生物管理実習 2	1.0	1-5	夏休み	集中	南アルプスほか	佐方啓介、武　正憲、伊藤太一	9 月～ 10 月予定　南アルプスほか (3 泊 4 日)
02JZ111	自然保護特別実習 1 (E)	2.0	1-5	夏休み	集中	学外	吉田正人、稲葉信子	Nature-Culture Linkage の実習
02JZ113	自然保護特別実習 2	2.0	1-5	通年	随時	学外	佐伯いく代	国際シンポジウム企画運営
02JZ112 =01EC539*	自然遺産実習	2.0	1-5	夏休み	集中	小笠原	吉田正人、佐伯いく代	8 月～ 9 月　小笠原諸島父島 (5 泊 6 日 (予定))
02JZ201	短期インターンシップ	1.0	1-5	通年	随時	国内外	佐方啓介、佐伯いく代	1 ヶ月未満 (10 日程度)
02JZ202	中期インターンシップ	2.0	1-5	通年	随時	国内外	佐方啓介、佐伯いく代	1 ヶ月以上、3 ヶ月未満 (20 日程度)
02JZ203	長期インターンシップ	3.0	1-5	通年	随時	国内外	佐方啓介、佐伯いく代	3 ヶ月以上、1 年以内 (40 日程度)
02JZ204	海外インターンシップ	5.0	1-5	通年	随時	国外	吉田正人、佐方啓介	6 ヶ月 (IUCN・スイス)
02JZ205	海外自然保護特別研究	3.0	1-5	通年	通年	国外	吉田正人、佐方啓介	タスマニア大学、ディーキン大学など提携大学での研究活動など

海外インターンシップ（世界自然保護連合：IUCN）報告

写真1

写真2

写真3

写真4

私は今回、自然保護寄附講座のご支援のもと、世界自然保護連合International Union for Conservation of Nature（以下IUCN）の世界遺産プログラムで半年間のインターンシップを行ってまいりました。IUCNの本部はスイスのジュネーブ近郊の町、グランにあり、本部で働く200～300人のうち、世界遺産プログラムには6名の方が所属していらっしゃいます（写真1、2）。私がお手伝いさせていただいた主な業務は、世界遺産委員会の準備と世界自然保護会議の準備の2つに分かれるため、以下、それぞれについて業務内容と感想を簡単に述べさせていただきます。

第40回世界遺産委員会の準備

今年の世界遺産委員会は7月半ばにトルコのイスタンブールで行われました。情勢不安のため、残念ながら私は会議自体には出席できませんでしたが、事前準備の方に携わらせていただきました。私がお手伝いした業務は、評価書の生物名のチェックや、IUCNメンバーへのニュースレター、各国使節への手紙の作成の手伝いなどに加え、メインの業務として、第40回世界遺産委員会の概要の作成と、サイドイベントの管理があります。概要に含まれる内容は、会議のプログラムや、どの資産が議論され、誰がいつ演台に立つかという業務に関わることから、イスタンブールの市内交通や空港の情報等一般的な事まで多岐にわたります。サイドイベントは、会議の合間に諮問機関等によって行われるイベントで、IUCNでもいくつかイベントを開催することを決定し、私はその取りまとめと管理、ICOMOSのサイドイベントの担当者の方と連絡を交わして、プログラムの調整を行いました。実際に会議に行くことがかなわず、委員会の雰囲気を肌で感じることができず残念でしたが、世界遺産委員会のための業務に携わらせていただくことで、諮問機関がどのように会議に向けて準備を進めているのか、世界遺産に関してIUCNの中で何が話し合われているのかについてふれることができ、大学の授業で学んだことの現実の場面を見るという、大きな経験を得ることができたと思います。

世界自然保護会議の準備

世界自然保護会議World Conservation Congressは4年に一度IUCNによって開催される、自然保護に関する最も大規模で重要なイベントのひとつです。IUCNのメンバーのみならず、世界中から環境保護や自然資源の管理・利用などに携わる方々が参加し、前半のフォーラムでは多種多様なイベントが行われ、後半の総会ではIUCNの方針について議論が交わされます。2016年の開催地はアメリカのハワイ州ホノルルでした（写真3）。

私は主に、世界遺産プログラムのチームが主催するWorld Heritage JourneyとNature-Culture Journeyのお手伝いをさせていただきました。各Journeyの中にたくさんの、それぞれのテーマに関わるイベントがあり、イベントごとに責任者や話し手がいます。私はこれらのイベントのためのリストの作成や更新、またイベント関係者の連絡先の管理を行いました。他の仕事としては、Nature-Culture Journeyのために作られたグループサイトの更新や、イベントのフライヤーの作成、ハワイへの配送の準備などがあります。特に印象的だった業務は、Nature-Culture Journeyのために缶バッジをデザインし、イベントで関係者の皆さんに配布したことです（写真4）。私がデザインしていいのかと最初は戸惑いましたが、現地で缶バッジを受けとった方が喜んでくださったり、デザインを褒めてくださると、私もとても嬉しくなり、やりがいを感じられました。現地ではイベントの手伝いや、チームが関わるイベントの情報更新等を行いました。フォーラム開催中はまた、これら二つのJourneyのイベントも多く開催されるProtected Planet Pavilionのお手伝いもさせていただき、会場設営や整備、イベントの調整を行いました（写真5）。

準備段階から関わらせていただいていたものが、実際に現場で運営されていくのを見るととても感慨深く、私がお手伝いしたのが小さなことではあっても、IUCNのチームの一員としてこの大規模な会議に貢献できたのだと思うと、喜びと同時に達成感を得ることができました。忙しくて目が回りそうなこともありましたが、興味のあるイベントの見学や、会場内の散策の時間もいただき、様々な形で自然に関わる、世界中から来た方々の熱気のようなものを直に感じられ、またそのような方々とお話しできたのも、本当に貴重な経験のひとつです（写真6）。

写真5

写真6

感想

社会で働くこと、こんなにも国際的に多様な場に身を置くこと、そのどちらもが私にとっては初めてのことであり、壁にぶつかったり心が折れそうになった回数は数えきれません。しかし同時に全てが新鮮で、面白く、興味深く、落ち込んでいる暇がないくらいだったこと、そして周りの方々が本当に優しく私を受け入れてくださったことが、この半年間を、私の人生でも最も有意義で刺激と発見に満ちた時間のひとつにしてくれました。このような機会を私に与えてくださった先生方、応援してくれた家族や友人、そしてこの半年の間にスイスやハワイで出会うことができた素敵な方々に、心からの感謝を申し上げます。

「サスティナブルコーヒー」が切り開く未来の可能性

講義：サイエンティフィックジャーナリズム報告、文：菊池美紗子

年間900万トンの生産量を誇り、世界中で愛される嗜好品、コーヒー。

しかし、コーヒーがどこからやってくるのか意識して飲んでいる人は多くはないだろう。コーヒーは、赤道付近に位置する70ヵ国以上の国々の畑からやってくる農作物なのである。

左から、コーヒーの収穫風景、コーヒーの実、ハワイのコーヒー農園（筆者撮影）

東京大学東洋文化研究所教授の池本幸生氏。

満員の会場。「サスティナブルコーヒーとは何だろうか?」という、少々難しいテーマにも関わらず、このテーマに対する聴衆の関心の高さが伺えた。

この数年、日本では「ブルーボトルコーヒー」が上陸したことなどがきっかけとなり、雑誌やテレビでもコーヒーの特集が増えた。コーヒー豆の栽培も注目されるようになり、「サスティナブルコーヒー」という言葉も散見するようになった。直訳すると「持続可能なコーヒー」となるが、一体どういう意味なのだろう。その実態を探るため、2016年7月25日、東京大学で開催された「第47回コーヒーサロン：サスティナブルコーヒーとは何だろうか?」という講演会を取材した。

世界が“持続的な開発”に目覚めるまでの道のり

講演会ではまず、東京大学東洋文化研究所教授の池本幸生氏が「持続可能な開発とは?」というタイトルで、「持続可能な」「サスティナブル」という考え方の派生や意味、そしてそれに通ずる思想について解説した。

持続可能な開発という言葉が生まれるより前に、資源の枯渇に警鐘を鳴らした知識人として紹介されたのがバックミンスター・フラーである。フラーは「宇宙船地球号」という言い回しを使い始めた人で、地球を一つの閉じた空間という意味で宇宙船に喩え、有限な化石燃料を消費し続けることの愚かさを指摘した。のちに経済学者であるケネス・E・ボールディングが、フラーの言葉を引いて『来たるべき宇宙船地球号の経済学』というタイトルのエッセイを書いている。

フラーやボールディングが彼らのオリジナルな思想を展開したのは1960年代であるが、日本でこうした思想が意識され始めたのは1970年代。この頃、日本では四大公害病を始めとした公害が問題となり、また二度の石油危機が起きた。「高度経済成長を遂げた日本で、資源の有限性や環境汚染が強く意識され始めた」と池本氏は考察した。

次に同氏は、現在でも「持続可能な開発」の言葉の原義として引用されている1987年の「ブルントラント報告書」を紹介した。国際連合の「環境と開発に関する世界委員会」（通称、ブルントラント委員会）が1987年に発行した最終報告書であり、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」という概念が書かれている。

最後に池本氏は、現在世界が取り組んでいる行動指針として「Sustainable Development Goals(SDGs)」を紹介した。2015年9月の国連総会で採択されたこの指針は、社会的、経済的、環境的という3つの視点から構成されている。トリプルボトムラインと言われるこの視点は、SDGsだけでなく、フェアトレードラベルやレインフォレストアライアンスなどの認証団体のそれぞれの指針にも採用されているという。

コーヒー栽培が直面する問題の数々

次に、（株）ミカフェート社長の川島良彰氏が「サスティナブルコーヒーとは?」というタイトルで、コーヒービジネスにおけるアンサスティナブルな問題について、社会、経済、環境の三つの視点から包括的に解説した。本記事では、経済、環境面での問題について特に着目し紹介したい。

株）ミカフェート社長の川島良彰氏。

2001年、コーヒーの取引価格の大暴落が世界中のコーヒー農家を襲った。悲劇の始まりは1997年、コーヒーが投機ファンドの対象になったことであるという。コーヒーは徐々に価格を上げていったが、そのバブルは2001年崩壊し、一時1ポンド318セントまで上昇したコーヒーの価格は1ポンド41セントまで暴落したのだ。

コーヒー農家は、コーヒーを作っても生活していけない状況に追い込まれ、農園は次から次へと夜逃げ同然に放棄された。後に「コーヒークライシス」と呼ばれ、コーヒービジネスの持続性を脅かした大事件である。

コーヒー業界はこのコーヒークライシスによって大いに揺らぎ、「サスティナブル」という言葉を意識するようになった。生産者がコーヒーを作って生活していけなければ、コーヒーを売る側もいずれは破滅の一途を辿ることに気づいたのだ。

さらに川島氏は、「可哀想な生産者」ばかりクローズアップされる状況にも警鐘を鳴らした。コーヒーの取引価格が上昇すれば、可哀想な輸入業者や焙煎業者が生れる。この状況もやはり、コーヒークライシスと同様にアンサスティナブルな状況なのである。「コーヒーのビジネスに関わる全てのサプライチェーン（コーヒーの栽培から販売までにある全ての段階）がサスティナブルにならないかぎり、サスティナブルなコーヒーは実現しない」と同氏は強調した。

アンサスティナブルな問題はコーヒーの取引価格だけに起因するものではない。冒頭でも述べたように、コーヒーは農作物なのであり、コーヒー農家は近年のめまぐるしい気象変動に悩まされている。乾季と雨季のパターンの変化、ラニーニャやエルニーニョ、大雨や干ばつ・・様々な気象変動の影響は、収穫期の変化、生産量の減少、インフラの破壊など多岐にわたっており、しかもその一つ一つが無視できないほど深刻である。温暖化によりコーヒーの栽培適地が減少しつつあることも問題だ。以前は標高1200m以下でしか発生しなかったコーヒーの病気が、近年では1700mくらいでも発生するようになってきたという。また、標高が100m上がると気温が0.6℃下がるため、気温が上昇すれば従来よりも標高の高い地域でコーヒーを栽培しなければならない。「温暖化の影響で2050年にはコーヒーの栽培適地が今の半分になるのではとも言われている」と川島氏は述べている。

コーヒーで未来は変わるのか

以上のように、「持続可能なコーヒー栽培」を実現するための道のりは平坦ではなさそうだ。しかし、日陰で栽培が可能なコーヒーは、実は環境保全も両立させながら、サスティナブルに開発を進めていくための最良の手段となりうる、と筆者は考える。

国際コーヒー機関（ICO）によると日本のコーヒーの消費量は世界で4位である。我々一人ひとりが、あの黒い液体を飲む度に、遠い国で栽培されているコーヒーの木を巡る情勢を知り、想いを馳せ、行動を起こすようになれば、未来は変わるかもしれない。

メキシコで新しい音楽祭 第2回「カラクムル・フェスト」開催

～マヤ系先住民言語でラップ！民族の誇りを現代音楽で歌う若者たち～

（講義：サイエンティフィックジャーナリズム報告、文：渡辺裕木）

2016年10月下旬、メキシコ・ユカタン半島カンペチェ州の片田舎で、第2回「カラクムル・フェスト」が開催されました。これはその名の通り、世界複合遺産カラクムルの熱帯保護林に散らばる6つの共同体（村）を会場に、地元の人々が主体となって開かれる音楽の祭典です。この地域住民の大半を占めるのは、古代マヤ文明を築いた人々の末裔であるマヤ系先住民で、彼らは貧しさゆえに、昔ながらの生活様式を、例え不便であっても継承するしかない一方で、美しい文化、守るべき伝統を楽しむ余裕はありません。このような状況を打破する新しい取り組みの一つとして、一昨年、NGO団体「マヤ荘園基金（Fundación Hacienda del Mundo Maya）」は、同地域の文化の真価を住民ら自らが再確認できる場の創造を目指し、「カラクムル・フェスト」を企画しました。本稿では、昨年秋に開催された第2回のイベントの様子を、文化人類学の視点から、地域の歴史的背景を交えレポートします。

メキシコ中部-南東部の地図。世界複合遺産「カラクムルの古代マヤ都市と熱帯保護林」は、ユカタン半島の根元、ベリーズやグアテマラの国境にほど近い位置にある。

歴史や文化を表現する歌や踊り～第2回「カラクムル・フェスト」の演目

第2回「カラクムル・フェスト」では、地元カンペチェ州出身者を中心とする、プロ或いはアマチュアのアーティストらが、メキシコ各地の民族舞踊や伝統的な楽器の演奏、古代文明の儀礼を再現した踊り、民謡を現代風の音楽にアレンジしたものなどを披露し、メキシコ文化の多様性が表現された音楽祭となりました。出演アーティストは、まず実行委員会が出演希望者を募り、作品に攻撃的な歌詞などを含まない事、オリジナリティーと創造性に優れている事を基準として絞り込んだ後、共同体の人々の意向が強く反映するオーディションによって選ばれました。音楽祭の大きな目的は「ムンド・マヤ(マヤの世界)」と呼ばれる同地域の文化の、住民自らによる再認識、再評価ですが、同地域の先住民族共同体の中には、メキシコ国内の別の地域の先住民の移住により形成されたものもあり、したがって同音楽祭の演目も、マヤ系先住民文化に関連があるものばかりではありません。長い時を経て、良くも悪くも折衷や変化を遂げた現在のメキシコ先住民族文化の、率直な表現の結集と言えるプログラムとなりました。

第2回「カラクムル・フェスト」の会場となった共同体の一つ、ベインテ・デ・ノビエンブレ村の風景（2011年筆者撮影）
この辺りの共同体では、最低限のインフラが辛うじて整う程度の前近代的な生活様式が未だに残っている。

カステジョットNo.2村の会場で披露された民族舞踊（「カラクムル・フェスト」フェイスブックより）

マヤ語ラッパー、パット・ボーイの登場

今回の出演者の一人、パット・ボーイは、マヤ語とスペイン語のバイリンガル・ラッパーです。現在19歳のパット・ボーイは、村民の多くがマヤ語を話す共同体の一つで成長し、若干12歳で自らが作ったラップを歌い始めました。きっかけはマヤ語で歌うレゲエ歌手の影響で、マヤ語にはラップに重要な韻を踏む要素が強いと気づきました。パット・ボーイの作品は、民族音楽を古臭く感じている若者たちにも受け入れられ、徐々に広い範囲で認められつつあります。今回音楽監督の強い推薦により、カンペチェ・シンフォニー管弦楽団と競演した舞台では、「ムンド・マヤ」への憧憬や、自分たちが受け継ぐマヤの血の誇りを歌いました。彼のパフォーマンスは音楽祭を多いに盛り上げ、第2回「カラクムル・フェスト」のハイライトとなりました。

パット・ボーイ（右）の出演を知らせる「カラクムル・フェスト」のポスター

メキシコ文化の多様性と先住民問題

メキシコでは、今から三千年以上も前から、特に天文学や建築学に優れた多くの文明が興亡を繰り返しました。現在巨大建造物の見られる古代遺跡を通して印象の強い、マヤ文明やアステカ文明はその例です。16世紀に入ってスペインに征服されると、同国による植民地支配が約300年間続き、当時「ヌエバ・エスパーニャ（新スペイン）」と呼ばれたメキシコは、西欧文化を基盤に置いた国に生まれ変わりました。19世紀初頭に独立を果たし、近代国家としての発展が始まった後も、アメリカやフランスとの戦争や内乱が相次ぎ、先住民と非先住民の間の人種的、民族的、あるいは文化的な齟齬は、メキシコにとってより複雑で深刻な問題でした。先住民の社会的地位の低さや貧困問題はなかなか改善されず、不平等な制度や政策に尊厳を傷つけられた先住民の武装蜂起も頻発し、「カラクムル・フェスト」が開催されたカンペチェ州を含むユカタン半島全域では、独立運動が勃発するほどでした。

一方で先住民の人々は、社会的に不平等な立場に追いやられつつも、宗主国スペインの文化を吸収し、独自の文化を育みました。今もなお一部の先住民族が継承する民族衣装や、聞く者にエキゾチックな印象を残すフォルクローレ（ラテンアメリカの民族音楽）は、先スペイン期（スペイン人が入植する前の時代）のセンスと欧州の文化が融合して生まれたものです。

NGO団体「マヤ荘園基金」の取り組み

「カラクム・フェスト」を主催するマヤ荘園基金（2002年設立）は、90年代のユカタン半島における観光開発事業から発展したものです。基金は、地域の貧困問題を解決に導く取り組みとして、世界複合遺産にも認定されたカラクムル周辺の自然と文化を、設立以来ずっと有意義に活用してきました。先住民の、自然環境への理解を深め、保全と活用の工夫を促すと同時に、彼らが伝統技術を継承し、民芸品作家として活動できる場を広げる企画などを実施してきました。全ての活動に共通する特徴は、外部から資源や人材を導入して先住民を「働かせる」のではなく、先住民が自分たちの守るべき自然や文化を理解し、自発的に経済活動にも繋げていく事のできる知識や技術をトレーニングしている事です。「カラクムル・フェスト」でも、基金の協力は一時的なものと想定されており、近い将来共同体の人々自らがイベントを管理、運営する事が期待されています。

おわりに

根が深く複雑なメキシコの先住民族問題は、今日でも日常的に報道される各地の抗議行動などからうかがい知る事ができます。国の政策にも希望が見えず、暗澹とした気持ちにさせられます。しかし、今回取材した、「マヤ荘園基金」の地域に根差した活動は、久しぶりに聞いた明るいニュースでした。先住民自身の啓蒙を目的とする「カラクムル・フェスト」では、先住民文化の魅力を積極的に発信しており、パット・ボーイらマヤ文化の新しい発展を担う若者たちも登場しました。

パット・ボーイのラップは、マヤ語の歌詞に多少のスペイン語表現を混ぜる事で、彼のマヤ文化に対する愛情や敬意を豊かに表現しています。これは、メキシコ国内の少数民族言語話者が5年毎に約10%の割合で減少している中、マヤ語を「生きた言語」として継承するユニークな民族文化活動で、「現代のマヤ文化」創造の一つの可能性とも考えられるのではないでしょうか。
「カラクムル・フェスト」を含む「マヤ荘園基金」の取り組みが、今後、メキシコ先住民族が現代社会の中で尊厳を傷つけられず生きるため、また、自分たちへの待遇を改善させて貧困から抜け出すための具体的な活動へと継続・発展して行くことを期待しつつ、見続けて行きたいと思います。カラクムル周辺の共同体のみならず、全国の先住民問題にも影響を与えうる活動へ成長する事を願っています。

国際公開シンポジウム

「第１回アジア太平洋地域の遺産保護における自然と文化の連携に関する人材育成ワークショップ」
“First Capacity Building Workshop on Nature-Culature Linkages in Heritage Conservation in Asia and the Pacific (CBWNCL)”

2016年9月18日～30日、自然保護寄附講座の国際シンポジウムであるとともにつくばグローバルサイエンスウィーク参加行事として、第１回アジア太平洋地域の遺産保護における自然と文化の連携に関する人材育成ワークショップを開催しました。近年、世界遺産分野における自然と文化の関係が注目され、その評価や管理ができる人材育成が求められていることから、アジア太平洋地域では筑波大学が主催してワークショップを開催したものです。第１回は農業景観（Agricultural Landscape）をテーマに、中国、香港、台湾、フィリピン、バングラデシュ、スリランカ、インド、トルコ、オーストラリアなどアジア太平洋各国からの参加者 14 名に自然保護寄附講座の履修生５名が加わり、筑波大学内での授業のほか、白川郷・五箇山、能登半島へのエクスカーションを通じて、農業景観保全のための課題や提言をまとめました。

世界遺産条約における自然と文化の連携
Nature-Culture Linkages in the World Heritage Convention

ユネスコ世界遺産センター長
メクティルド　ロスラー
Director IUCN World Heritage Programme
Dr. Mechitild Rössler

文化と自然の連携 ー IUCN と ICOMOS のイニシアチブ
Connecting Practice, Linking Culture and Nature

IUCN 世界遺産プログラム部長
ティム　バッドマン
Directore IUCN World Heritage Programme
Mr. Tim Badman

景観保全に果たす住民の役割：景観の多様化とガバナンスの多様化
Stewardship of protected landscapes by communities: Diverse landscapes, diverse governance models

IUCN WCPA 景観保護地域専門家グループ委員長
ジェシカ　ブラウン
Executive Director New England Biolabs
Ms. Jessica Brown

自然と文化の保全に対する住民主体の取り組み
People-centered approaches to Conservation of Nature and Culture

ICCROM プログラムマネージャー
ガミニ　ウィジャスリヤ
Project Manager ICCROM
Dr. Gamini Wijesuriya

スバックシステム ーバリ島における文化と人と自然との共生的調和
The Subak System: The Indigenous Symbiotic Harmony of Culture, Human and Nature in Bali, Indonesia

ガジャマダ大学
ヨヨ　スブロト
Gadjah Mada University, Indonesia
Prof. Yoyok Subroto

自然文化遺産の保全における生物文化概念の適用
Applying biocultural concepts to practices fornatural and cultural heritage

ディーキン大学
クリスタル　バックレー
Executive Director New England Biolabs
Ms. Kristal Buckley

18 日には、つくば国際会議場において、ワークショップ開催を記念した国際シンポジウムをし、ユネスコ世界遺産センター所長のメクチルド・ロスラー博士をはじめ、IUCN、ICOMOS、ICCROM、オーストラリアのディーキン大学、インドネシアのガジャマダ大学からのゲストスピーカーによる講演とパネルディスカッションが行われました。このプログラムは、日本ユネスコ国内委員会を通じてユネスコ本部に申請され、筑波大学唯一のユネスコチェアプログラムとして認められる予定です。

30 日には、ワークショップ参加者は、学長より修了証を授与され、日本で得た経験を母国に持ち帰って、自然や文化の遺産保護に従事しています。

なお、2017 年は 9 月 15 日から 26 日の予定で、つくばグローバルサイエンスウィークの参加行事として、聖なる地(Sacred Site）をテーマに第２回のワークショップを開催する予定です。

インターンシップ体験談

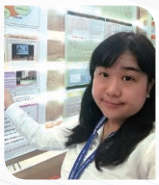
(c)WWF Japan

今回私はWWF Japanで2週間のインターンシップを行いました。その中で私はメコン地域における新規プロジェクト開拓にあたってのデスクトップ調査を担当させていただきました。責任重大な業務を任され緊張こそしましたが、結果として非常に多くの学びを得ることができました。

国毎に保全活動の現状は大きく異なること、単に技術・人材・金銭的な問題だけでなく、政治、宗教、産業、国民性など様々な要因が複雑に影響していることなど、国際的な視点で保全に関して深く考える機会を得たのは自分にとって非常に大きな意味を持ちました。

具体的な自然保護活動の現状や課題だけでなく、今回のインターンではそれを実践する職員の方についても深く知ることができました。どの方も本当に強い思いを持って活動されているのですが、そういった熱意だけでなく、専門的知識やドナーやメディアの方と会話するだけの対話力、予期せぬ事態に対応する対応力、語学力など非常に多岐にわたる能力も持ち合わせているのだと感じました。能力、熱意、そして世界的なWWFネットワーク、これらによってWWFの素晴らしい活動が成り立っているのだと気づくことができました。

このように今回のインターンを通じて多くの学びを得ることができただけでなく、インターン生ながらプロジェクトの一端を担うことができた喜びや達成感も感じることができました。とても貴重な機会を与えていただいた皆様に心より感謝申し上げます。　（生命環境科学研究科M1・福井俊介）



2016年11月より、IUCN-J（Japan Committee of International Union for conservation of Nature: 国際自然保護連合日本委員会）で、3ヶ月間のインターンシップをさせて頂いています。

インターンのテーマを一言で言うと「生物多様性」です。主な業務は、12月4～17日にメキシコ・カンクンで行われたCBD-COP13（13th meeting of Conference of Parties on Convention of Biodiversity: 第13回生物多様性条約締約国会議）への参加、その前後の準備でした。具体的な業務として、会議前には、ポスターやポジションペーパーの英訳、参加するサイドイベント一覧作りを行いました。会議中は、会議文書とその議論の要点を整理したり、IUCN-J共催のイベントの運営補助をしたり、活動内容を発信するブログ記事を書いたりしていました。現在は、報告会に向けレポート等を作成しています。

CBD-COP13に出席してみて、生物多様性という概念の奥深さに圧倒されました。生物多様性に関わるホットな話題（主流化、先住民族と地元コミュニティ、合成生物学等）に触れたり、文書の背後にある国やIGO、NGOの動きをありありと感じたりできたのは、大きな学びでした。

英語にはある程度自信がありましたが、会議では、知らない固有名詞が数多く出てきたこと、また、単語が分かっても全体の意味が掴めなかったことで、苦労しました。そんな時に、インターン先の職員の方々には何度も質問させて頂けて、心強く感じました。

インターン期間も残り少なくなってきましたが、機会を与えて下さった周囲の方々に感謝し、一層知見を深めていきたいと考えています。　（生命環境科学研究科M1・牧野　悠）

私は環境省の自然環境局野生生物課希少種保全推進室で2週間のインターンシップを行いました。希少種保全推進室では、希少種の保全施策として希少種の指定や保護増殖事業の実施等を行っています。

私は、主に種の保存法に関する疑義照会の整理、保護増殖事業計画の記載内容を項目ごとにまとめる作業を行いました。この作業を通して、実際、現場でどのように種の保存法が活用されているのか、地方自治体の希少種に対する政策、各種における保護増殖事業計画の実施内容を学ぶことができました。

また、デスクワークだけでなく、種の保存法に関する政策研究会や生息域外保全に関する打ち合わせなどにも参加させていただき、環境省と他の機関との繋がりを知ることができました。さらに、トキやカラスバト、コウノトリなどの生息域外保全の現場も見せていただき、生息域外保全を行うにあたっての工夫や苦労したことについて伺うことができました。

このインターンシップを通して、一つの法律や保護計画を作るために、様々な機関が関わっていること、そして、環境省はその機関を繋ぐ重要なパイプ役であると感じました。また、環境問題の最前線で働いている方々の仕事姿・声を見聞きできたことは、これからの環境保全を考える上でとても参考になりました。このように貴重な体験をさせていただいた環境省、自然寄附講座の皆さまに心より御礼申し上げます。

（生命環境科学研究科M1・近藤瑞穂）

私は岐阜県のトヨタ白川郷自然學校へ2週間滞在し、宿泊客向けプログラムと子ども向けキャンプの設備管理や運営に携わりました。特に印象に残ったのが、伝統的な白川郷で7日間、自然と文化を実体感する子ども向けプログラムです。全国各地の小中学生が、住民の協力を得ながら1つの家で共同生活しました。年齢や育った環境を越えて互いに力を合わせ助け合うことで、日々の料理から白川郷の屋根つくりまで協力することができました。

私はこの体験を通じて、「結い」の精神と同様に人を巻き込み協力し合うことが自然保護においても重要ではないかと感じました。「結い」とは、一人で行うには多大な費用と期間、そして労力が必要な作業を、集落の住民総出で助け合い、協力し合う相互扶助の精神です。私がこの「結い」の精神を知ることで、日本らしい美しさを切に感じたとともに、自分自身の自然保護活動に生かすことができると確信を覚えました。

寄附講座には、異なる専門領域の学生がいますが、議論を重ねることで、今までにない提案ができるわくわくする瞬間がありました。1つの事業に取り組む共同作業の場面において、多様なバックグラウンドを持った人が協力する環境が不可欠であることを感じました。

最後になりましたが、このように素晴らしい機会を与えて下さいました、トヨタ白川郷自然學校、自然保護寄附講座の皆様に心より感謝申し上げます。

（生命環境科学研究科M1・森山大気）

2016年タスマニア実習

タスマニア実習ではタスマニア島の自然から文化まで様々なものを見たり触れたりできて、私にとって非常に有意義で貴重な経験となりました。私がタスマニア島で最も印象に残ったものは、自然の豊かさです。約 1 週間の間に、多くのスポットを訪れたのですが、どの場所も美しく、また、地質学的にも興味深かったです。タスマニア島には柱状節理やモレーン湖、砂岩が作った地形など、多種多様なジオスポットがあり、自然の作った大地の広大さや歴史感を存分に感じることができました。また、タスマニア島での野生動物との遭遇率の高さにも驚きました。人の多い町から少し離れるとハリモグラやワラビーが道を横切っていたり、国立公園やその周辺を歩いていてもワラビーやポッサムなどの野生動物と遭遇したりして、自然の豊かさを実感しました。北海道よりも小さな島に、これだけ盛沢山な自然や文化を感じることのできるタスマニア島はとても魅力的でした。この実習を通して、タスマニア島の自然に触れることができたとともに、自然保護・保全するにあたって大切なことは何か、国立公園の在り方などに関して改めて考えることもできました。このような、タスマニア島を訪れる素晴らしい機会を与えてくださった自然保寄附講座座の皆様、現地でレクチャーをしてくださったタスマニア大学の皆様に心より御礼申し上げます。

（生命環境科学研究科 M2・三谷彩木）

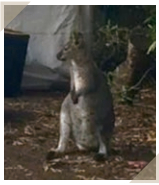
タスマニア島は世界自然遺産と世界文化遺産を有する複合遺産地域である。一体どんなところなのか、私はこの実習に参加することをとても楽しみにしていた。

タスマニアに到着すると、港に面したかわいらしい街を横目に、まずはタスマニア大学へ向かった。大学では現地の学生とともに講義を受けた。国立公園のマネージメントについて、概念的な話から、世界自然遺産登録の背景、保護地域や市街地のゾーニングの検討、遊歩道の管理や資金集めなど実践的な内容を含んだ講義だった。タスマニア大学の学生の中には国立公園や教育現場で働いた経験のある方も講義を受けており、質疑応答でも実務と関連した話題が多く、大学と現場のつながりを感じた。

楽しみにしていたフィールドワークでは、ユーカリの巨木や南極ブナが見られる森を歩いた。日本とは異なる植生がつくり出す景観に目を奪われた。他にも、海岸線のダイナミックな地形に圧倒された。今も息づくアボリジニの文化に触れる機会もあった。悲しい歴史を持ち合わせていることも知った。そしてタスマニアデビルやウォンバットはものすごくキュートだった。

世界遺産の価値は1つの基準で測ることは難しいが、私は確かに人を魅了する価値があることを実感した。国内の制度や世界遺産のしくみなどをうまく活用して今後もその価値を守っていく取り組みに注目したい。

（世界遺産専攻 M2・三ッ井聡美）



私がタスマニアで印象に残ったことは，大きく三つあります。まずは自然の景色です。特に，たくさんの倒木が印象に残りました。自然に枯れている樹木もあれば苔がついている巨木もあり、それらは道の妨げになっていたり、山側に積み重なっていたりと、その有り様は様々でした。それらによって造られた景色は，枯れている滝のような印象を持ちました。中国の故郷や日本で見た風景と大きく異なっていたので，自分の中での自然に関する定義が新しくなりました。人の手が加わっていないだけではなく、生きている様子や枯れていく様子も含めて自然の重要な一部として、美しく輝いていると感じました。

二つ目は，人間と動物が共生している環境です。タスマニアでは，人間と野生動物が同じ空間の中で自由に生活していると感じました。それは，これまで一度も想像したこともない環境でした。人が好きな娯楽を活動している脇で，動物は自由に走りまわっていました。人はこの空間の支配者ではなく、動物を傷つけることもないため、動物は人間を必要以上に怖がらず、共生する様子を見ることができました。

最後は，出会った人々です。いつも話をかけてくれた優しいおじいさんは，人見知りの私に「勇気を出せ」と励ましてくれました。情熱をもって解説してくれた先生やガイドの方々，一緒に学んだ仲間たちなど，いろんな人に出会うことができました。私にとって、タスマニア実習は単なる実習ではなく，多くを学ぶことのできた大変意義のある体験でした。

（生命環境科学研究科 M2・王　皓宇）

タスマニア大学の正規授業との合同実施で、本学から学生 8 名と教員 4 名の 12 名とタスマニア大学から学生 20 名（年齢もキャリアも多様！）とスタッフ 4 名の 24 名が参加する総勢 36 名が参加する大型フィールド実習であった。IUCN Protected Area Governance and Management の著者である Raeme Worboys 先生と Michael Lockwood 先生から、講義にて保護地域管理の理論を学びつつ、それを踏まえフィールドで実際の管理の様子を体験するという大変贅沢な 1 週間であった。Worboys 先生も Lockwood 先生も、平易な英語を使ったり、具体的な事例を紹介したりしながら、英語が得意でない学生にも理解できるように工夫してくださった。Tasman National Park でのフィールド活動では、キャンプ場に宿泊し、BBQ をしながら現地の学生やスタッフの交流を図ることができた。また、講義とフィールド活動の後には、ROS（Recreational Opportunity Spectrum：レクリエーション管理手法）を用いたワークショップは混合チームで行い、みんなの前で発表する機会を得た。癖のある英語で少し理解するのに苦労する様子も見られたが、一生懸命理解しよう質問している姿をみると、それもよい経験になったことと感じられた。

実習終了後に、佐伯先生と学生 4 名と一緒にエクスカーションで、世界自然遺産の Cradle Mountain-Lake St Clair National Park を訪れた際、カーナビで「120 ㎞先右折」と表示されたことや、「Highway」という地図表記を鵜呑みにしてフライトぎりぎりに空港に到着したことなどスケールの違いを体感できたのもよい思い出である。

（芸術系助教・武　正憲）

2017年3月1日発行　編集・発行　筑波大学大学院自然保護寄附講座事務局
〒305-8572　茨城県つくば市天王台1-1-1　筑波大学共同研究棟 A202 (029)-853-6344
E-mail：nature@heritage.tsukuba.ac.jp　自然保護寄附講座ホームページ：http://www.conservation.tsukuba.ac.jp